

シンポジウム④ 「妊婦に対する中医学」

座長：別府正志（東京医科歯科大学 医歯学教育システム研究センター 講師）

「妊娠中だからこそ使用したい漢方」

河上祥一（医療法人社団愛育会福田病院 院長）

「補腎健脾による流産の対策」

陳 志清（イスクラ産業株式会社）

妊娠中だからこそ使用したい漢方

河上祥一

医療法人社団愛育会福田病院

Sho-ichi Kawakami

Fukuda Hospital

漢方薬は、多くの日本人にとって、慣れ親しんでいる治療法であり、また、古くから使用されているので、代替療法として、信用され重宝されている。特に女性は、漢方への信頼が厚く、古典でも女性特有の症状に対し、いろいろな処方が記載されている。

一方、現代医学では、西洋医学のアプローチを主としており、各学会からガイドラインが出版され、そのガイドラインを指標に診療を行っている。産科婦人科学会からも産科、婦人科と分けて、ガイドラインが出ており、婦人科外来編 2011 ガイドラインでは、数種の漢方薬が記載されているが、産科編 2011 では、皆無である。また、漢方エキス剤で、催奇形性の動物実験がなされているのは、13種類のみである。

しかし、実際に産科診療を行っている時、妊娠中もしくは妊娠しているかもしれない患者様からは、西洋薬と漢方薬の両方の選択肢がある場合、特に妊娠初期では、漢方薬の希望が多い。さらに妊娠中のいろいろなトラブルに対しても、西洋薬では対応できない症状があり、ガイドラインに沿って、西洋薬のみで診療を行うよりも漢方薬を加えることによって、よい成績が残せることが多い。加えて、西洋医学的なアプローチがなされている漢方も増えてきている。今回は、妊娠だからこそ、漢方薬が有効であった事例を中心に紹介する。

補腎健脾による流産の対策

The measure against a miscarriage by HONJINKENPI

陳 志清

イスクラ産業株式会社

Shisei Chin

ISKRA INDUSTRY CO., LTD.

自然流産の発生率は約15%といわれているが、流産にはさまざまな原因があり、それぞれ対応も違う。特に原因がはっきりと分からない場合、対処がなかなか難しい。中医学では弁証論治に基づいて対処するが、臨床上、脾腎両虚による流産のケースが圧倒的に多く、補腎健脾によって、一定の効果が得られる。

流産の病態について、中医学では古来「胎漏」「胎動不安」「墮胎」「滑胎」などの表現があり、それぞれの内包が違い、対応も異なる。妊娠初期、少量な出血が不規則的に現れる場合を「胎漏」といい、腰やお腹の痛みがあつて、少量な出血が伴う場合は「胎動不安」という。「胎漏」と「胎動不安」は、切迫流産に近い状態である。一方、「墮胎」は胎児の一部または全部が既に流出し、妊娠継続が不可能な場合をさし、「滑胎」は「墮胎」が数回も繰り返されること、つまり「習慣性流産」に近い概念である。

ここでは主に「胎漏」「胎動不安」に対する中医学の対応について検討したい。

中医学では、腎が「先天の本」として、生殖機能を司り、腎気腎陽が胎児を固撰しながら、胎児の成長を促すとされている。流産と腎虚の関係については、『校注婦人良方』をはじめ、多くの古典に論述がある。脾は「後天の本」であり、気血の源として、胎児の成長に不可欠な栄養を与えている。腎虚の人は脾虚を兼ねることも多い。

古今流産の予防と治療に用いられた方剤を見ても、検討がつく。例えば、『医学衷中参西録』の「寿胎丸」、現代名医・羅元凱先生の「補腎育胎丸」、周期調節法の第一人者である夏桂成先生の「滋陰養胎方」などは、現在、臨床で流産防止によく使われている方剤だが、何れも補腎と健脾を兼ねた組み合わせであり、臨床効果も認められている。

【症例紹介】 30歳Hさん、2回自然妊娠して、それぞれ9週目と6週目で流産。検査では流産の原因と特定できるような異常は見つからなかった。自覚症状として、冷感性、むくみ易い、月経痛（腰とお腹）、月経前乳房の脹痛などがある。排卵が遅く、月経周期が不規則で長い傾向、基礎体温は低温期36度を下回る場合もある。年齢や流産歴、自覚症状などから、脾腎両虚、気滞血瘀と判断し、補腎固衝、健脾養血、理気活血の薬を使った。月経痛やむくみ、冷えなどの症状が徐々に改善され、数カ月後、3回目の妊娠ができた。しかし、時々少量の出血があり、心拍が確認できた後も出血があつた。本人は過去の流産を思い出してとても不安だったが、補腎健脾、養血安胎の薬を服用しているうちに、出血がなくなった。12週以降も気血を補う薬を続けた。その後妊娠が順調に経過し、無事に元気な女の子が生まれた。